2022年度　神戸教区神学塾（信徒の神学）№.5

―　「祈祷書」は「信徒の祈りの本」　―

司祭 フランシス　小林史明

（序）祈祷書は、主に三つの部分で構成されています。

第３回では旧約、第４回では新約のお話をしました。私たちの信仰の基本は聖書です。どんなキリスト教の教派に属していても、聖書を通して神様の御心を知り、私たちの歩むべき道を示され、模範となったイエス様について行くことが、私たちの歩むべき道です。ところで、聖公会に属する私たちが、聖書以上に身近に手にしている祈祷書は、どんなものなのか、これを学ぶことで、私たちの信仰を強めることになると思いますので、学んでゆきましょう。

祈祷書のはじめの方、目次の前のページには次のようなことが書かれています。

『本書は聖なる公会の公祷、聖奠（サクラメント）および諸式を載せたもので日本聖公会の所用に属する』

これは、「公祷」「聖奠」「諸式」という三つのものが祈祷書には入っていることを示しています。これらが具体的には何を指しているのか、説明しようと思います。

（１）祈祷書の構成について

祈祷書をどのように定義づけるかは、時代によって、いろんな見解があります。皆さんが現在手にしておられる、表紙が緑色で、「祈祷書　日本聖公会」と書かれた本は、全体を祈祷書と呼ぶことが一般的ですが、少し詳しく分類すると次のようになります。

①　朝夕の礼拝から諸祈祷、感謝まで・・・・公祷（英語の Common Prayer）

②　聖餐式から入信の式まで・・・・・・・・聖奠（洗礼と聖餐が主な内容）

③　懺悔の式から礼拝堂聖別式まで・・・・・諸式（聖奠的諸式というのもありますが。）

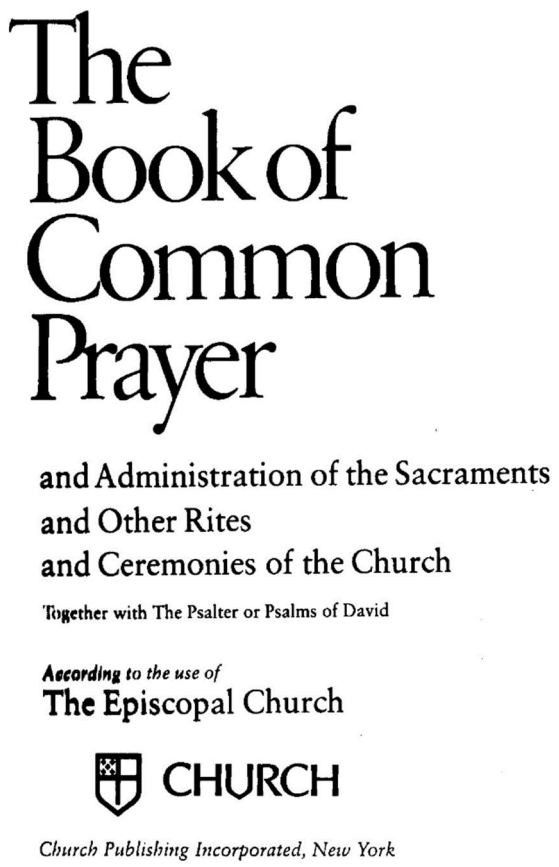
＊付録　聖書日課・詩編　＊祈祷書の最初の教会暦（１～１７頁）も付録でしょうね。

①の公祷が祈祷書の中心、というより祈祷書そのもので、英語の Common Prayer が公祷も意味して、The Book of Common Prayer が祈祷書のことだと知ってほしいのです。

そのことを理解していただくためには、私たちの持っている日本語の祈祷書のもとになった、英語の祈祷書の表紙を見ることが、わかりやすいと思います。

（２）　アメリカ聖公会の祈祷書の表紙から

これは、２００７年版アメリカ聖公会の祈祷書の表紙です。上から見てください。



一番大きなタイトル「**The Book of Common Prayer**」が、「祈祷書」を意味します。これが前頁の分類の①**公祷**にあたります。

そしてそれに付け加えるように、小さな文字で、上から順に「**and Administration of the Sacraments**」つまり「そして聖奠（サクラメント）の実施」という字が来ます。これが②**聖奠**のことです。

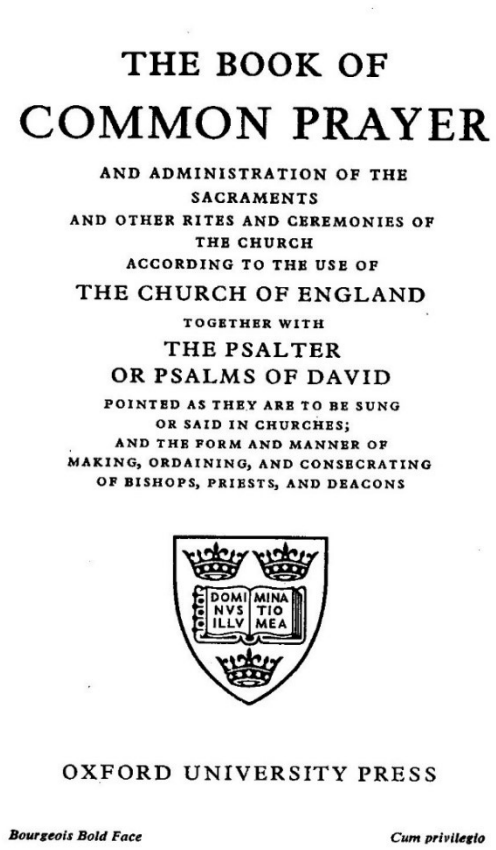
次の２行は「**and Other Rites and Ceremonies of the Church**」これを日本語にすると「そして教会の他の式文と儀式」。ということになります。これが③**諸式**ということになるのです。

さらに小さな字で「**Together with The Psalter or Psalms of David**」という文章が続きます。これは「詩編あるいはダビデの詩と一緒に」ということで、これは祈祷書に付録として詩編がついている、ということです。私たちの祈祷書の５１１頁から、聖書日課・詩編などがありますが、それらは、この本を使って礼拝する時の助けになる、付録という位置づけになると思います。

そのあとの４行についても少し説明します。最後の「**Church Publishing Incorporated, New York**」というのはニューヨークにある教会の出版社のこと。その上の「**マークと Church**」は、アメリカ聖公会を意味する印。その上の２行は「**According to the use of The Episcopal Church**」つまり「アメリカ聖公会の所用に従って」という意味です。「エピスコパル・チャ

ーチ」という言葉に驚かれるかもしれません。聖公会は「アングリカン・チャーチ」ではなかったか、と不思議に思われるでしょう。しかし、アングリカンという言葉は、語源的には、アングロ・サクソンという英国の伝統を引きずった言葉なのです。英国に対して独立戦争を戦った歴史を持つアメリカとしては、英国が支配するような意味の言葉より、自分たちが使徒たちからの主教制（監督制）の伝統に立っていることを主張したくてエピスコパル（主教制を意味する言葉）を使っているのです。聖公会綱憲第４には「使徒時代より継紹したる主教（エピスコポ）、司祭（プレズビテロ）、執事（デアコノ）の３職位を確守する。という表現でエピスコパルが出てきます。

参考までに、現在のイギリスの正式な祈祷書（１６６２年版）の表紙も紹介します。


THE BOOK OF
COMMON PRAYER
AND ADMINISTRATION OF THE
SACRAMENTS
AND OTHER RITES AND CEREMONIES OF
THE CHURCH
ACCORDING TO THE USE OF
THE CHURCH OF ENGLAND
TOGETHER WITH
THE PSALTER
OR PSALMS OF DAVID
POINTED AS THEY ARE TO BE SUNG
OR SAID IN CHURCHES;
AND THE FORM AND MANNER OF
MAKING, ORDAINING, AND CONSECRATING
OF BISHOPS, PRIESTS, AND DEACONS

OXFORD UNIVERSITY PRESS

Bourgeois Bold Face *Cum privilegio*

イギリスでも祈祷書はいろいろ改訂されているのですが、正式なものとして認められているのは、まだ１６６２年版の「第５祈祷書」と言われているものです。

前頁のものと比べてお分かりと思いますが、上から６行目までは、アメリカ聖公会のものと全く同じ言葉が並んでいます。

そのあとに独自の教会の名称や、教会の礼拝で歌ったり唱えられたりするダビデの詩や、主教、司祭、執事の按手式に使われる式文であることなども書いていますが、「公祷」「聖奠」「諸式」が、この本の中心であることは、ずっと聖公会の祈祷書に引き継がれていることがおわかりでしょう。

これから私は、それらの中でも、大きなタイトルの **The Book of Common Prayer**（公祷）と言われる「朝夕の礼拝」や「嘆願」が祈祷書の中心であり、「信徒の祈りの本」そのものであることを、私が神学校で学んだ古い本を引用して説明します。尚、当時は「朝夕の礼拝」を「早晩祷」と呼びました。「朝の礼拝」が「早祷」、「夕の礼拝」が「晩祷」と言われていたことを頭に置いて読んでください。私が学んだ本をそのまま次の頁に載せました。

第六章　早晩祷ならびに嘆願

英、米の教会におきましては、一般普通に Common Prayer という語は、祈祷書のすべての式を示すようになってまいりました。しかし祈祷書の表題を調べますとそこには Common Prayer というものと、他の式との相異が、はっきりしております。英語の祈祷書には The Book of Common Paryer and Administration of Sacraments and Other Rites and Ceremonies of the Church となっていまして、Common Prayer は他のものと区別されております。日本聖公会の祈祷書には表題には、その区別がありません。ただ表題の裏には、「本書は聖公会の公祷、聖奠および諸式を載せたもの」となっています。この一般の公祷（Common Prayer）を他の式と区別いたします事は、歴史的な根拠があるのであります。諸聖奠や他の諸式は、我らの主や、あるいは教会の公的な決定によって備えられたものであります。それらの本質的要素は、決定づけられているのであります。しかし一方、教会の Common Prayer は、厳格な意味におきまして、キリスト教徒の敬虔から自然に発生したものであります。もちろん教会は、公的にそうした個人の敬虔より生まれる祈祷を選択し、それを聖成いたしますが、しかしそれは本質的に信徒の礼拝と言わる

べきであります。それらにはあながち聖職の司式が必要とせられていないのであります。

コモンプレーヤーは、早晩祷と嘆願を含んでおります。これらの諸式は、ユダヤ教徒とキリスト教徒とを問わず、神の民らの日常生活の中における讃美、黙想、祈願等の豊かな経験よりもたらされたものであります。彼らのそうした感動ならびにその内容は、個人の敬虔から生まれたものであります。しかしながら、公祷はこれに対応して、個人の敬虔を本質的に高め、豊かにしているのであります。何を措いても、公祷は我らが神を礼拝するについて、自己中心的な態度、あるいは非常識な狂信などより免れて、我々が共同的に保っている、神への思慕の広い深い道に住わしむるのであります。

日ごとの礼拝は、我々の一般的キリスト教生活において、二つの目的をみたしてくれます。それらは、来る年も、来る年も、一日一日、正しい訓律を我々に与えるのであります。その訓律とは、神が我々を創造なさった事、そしてまた、我々を守り給う事、しかもその生涯における祝福のゆえに、神に対して全き従属をあらわすという事であります。それらは何をおいても、第一に先ずアドレーション（拝崇）の行為でなければなりません。その拝崇の行為によって、見ゆるものと、みえざるものを問わず、全宇宙がその創造主に、全き愛をもって信頼を表現する、止むことなきコーラスに加わるという事であります。これらの礼拝は、我々に神の言葉を間近かにもたらしてくれるのであります。神の我々に対する絶えざる愛しみを伝えてくれます。我々に対する神の正しき目的、更にまた彼の審判をすら教えてくれるのであります。

いきなり、縦書きの文書を出しましたが、これはアメリカ聖公会の教会の教えシリーズ４冊目、マーシー・H・シェパード著「教会の礼拝」（１９５２年版）を、神戸教区の八代斌助主教が、亡くなる前年の１９６９年に翻訳して出版されたものです。私はこれを神学校１年の１９８１年に礼拝学の入門書として学びました。本文４行目の英単語であるPrayer（祈り）がParyerとなっています。誤植ですので、ご了解ください。こうしてみると、英文の方が目に入りやすいですね。祈祷書の元の言葉「The Book of Common Prayer」が、現在では、祈祷書全体を指す言葉のように一般では受け止められています。

（３）公祷は信徒による礼拝・・・祈祷書の本来の意味

私は数年前、私が神学校で学んだこのシェパード著、「教会の礼拝」という本を、改めて読み直し、祈祷書の公祷の意義に気づかされました。

シェパードさんは、著書「教会の礼拝」の6章の最初で「英、米の教会におきましては、一般的にCommon Prayerという語は、祈祷書のすべての式を示すようになってまいりました。」と現状を語りながら、Common Prayerを他の式と区別いたします事は、歴史的な根拠があるのであります。」と言っています。

そして『諸聖奠や他の諸式は、「我らの主（注：諸聖奠とはイエス様が始められた、洗礼と聖餐のこと）や、あるいは教会の公的な決定（会議で定められた牧師任命式など）によって与えられたものであります。それらの本質的要素は、確立し定着しているのであります。しかし一方、教会のCommon Prayer（公祷）は、厳格な意味におきまして、キリスト教徒の敬虔から自然に発生したものであります。・・・それ（公祷のこと）は本質的に信徒の礼拝と言われるべきであります。」（１７４～１７５ページ）と主張します。

＊「The Book of Common Prayer」は、一般祈祷書と訳されることが多いのですが、「コモン」とは「共通の」「共同の」という意味のほかに「一般人の」「平民の」等の意味もあり、私はシェパードさんの主張から、これを「信徒の祈りの本」と呼びたい。そして、聖職がいないとできない聖餐式よりも、信徒が捧げる朝夕の礼拝こそが、聖公会の祈祷書の中心的な部分として、日常生活に結びつける必要があることを確認したいと思います。

（4）公祷は信徒の日常の信仰生活から生まれてきた

「教会の礼拝」の著者シェパードさんは、朝夕の礼拝などの公祷は、「ユダヤ教徒とキリスト教徒とを問わず、神の民らの日常生活の中における讃美、黙想、祈願等の豊かな経験よりもたらされたもの」であると言います。（１７５ページ）

神の民の日常生活におけるこれらの信仰的行為について、例を挙げましょう。
ローマ帝国がキリスト教を公認して、やがて国教になった４世紀後半、ヘブライ語で書かれた旧約聖書、ギリシャ語で書かれた新約聖書を、ローマ人にわかるラテン語に翻訳した、ヒエロニムスという有名な司祭がいました。（祈祷書１５頁　９月３０日が記念日です。）
この人は、その翻訳作業をイエス様が生まれた、と言われているベツレヘムで行ないました。彼が読書黙想していると、その窓辺に周囲の畑から、詩編を歌う者の声が流れてきたことを、こんな風に書き記しています。

「その声は春の鳥の鳴く音に和して美しく耳にきこえ、花の香にまじって漂った。農夫は地を耕しながら歌い、麦刈る者、ぶどう園に働く働きびと、羊を飼う者などもまたダビデの歌（詩編）を唱えながら、そのわざをしていた。」（森譲著「信仰を生活する」より）

詩編の歌声が礼拝にも、日々の暮らしの中にも満ちわたるようになったら、すばらしいことです。そのような習慣を身に着けるために、祈祷書をもっと活用してほしいのです。現在、皆さんが祈祷書に触れるのは、聖餐式がほとんどでしょう。聖餐式が行われない時には、「み言葉の礼拝」という特別の式文を使うことが多いでしょう。でも聖餐式は、公祷とは言いにくい、「聖奠」に属するもの。ほとんどそれを踏襲している「み言葉の礼拝」では、聖公会の伝統的な公祷（Common Prayer）である、朝夕の礼拝には遠いのです。

祈祷書の１８ページ、朝夕の礼拝の次に書かれた、小さな字を読んでみてください。
「毎日聖書を朗読し、詩編を歌って神をほめたたえ、祈りを献げて日々の生活を神と人とのために清めることは、初代教会からの営みであった。」と先ずあります。

この礼拝には、二つの目的があります。①神様からの語りかけを聞くこと。②神様に語りかけること。それは、私たちが神様との間に信仰の呼吸をしているようなものです。

（５）神様との交わり、信仰の深呼吸

朝夕の礼拝で、私たちは、神様を賛美するために、聖歌や詩編や、ザカリヤの賛歌、賛美の歌など、私たちが神様に向かって声をあげて賛美します。これは自分の体から息を吐き出しているようなものです。神様の方から私たちに語りかけられるのを聞くという習慣もあります。第一日課、第二日課など、神様の言葉である聖書が読まれるのを聞いて、黙想しているのは、私たちが、神様の息を私たちの体に吸い込んでいることだと私は思います。

創世記の２章には、人間が創造された時のことが、次のように書かれています。
『主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。』（創世記２章７節）

私たちが聖書を読んだり、説教を聴いたりするのは、自分の体に神様からの息を吸い込んでいるという風に説明できると思います。そして、詩編や聖歌を歌ったり、祈りを献げるのは、息を体から吐き出すということでしょう。礼拝というのは、神様によって造られた人間の、一番基本的な行為なのです。

現在大変普及している新共同訳の聖書が出版された時、詩編の中に、画期的な翻訳の言葉が出現しました。
『後の世代のために
　　このことは書き記されねばならない。
　　「主を賛美するために民は創造された。」』（詩編１０２：１９）

これは、その後に出版された、聖書協会共同訳では、
『このことは後の世代のために書き記されるべきです。
　新たに創造される民は主を賛美するでしょう。』となっています。

『このこと』という言葉が指示しているのは、前者は、民（人間）が創造された目的と解しているのですが、本来は、バビロニアによって滅ぼされたシオン（エルサレム）が復興されると、それを目の当たりにする後の世代は、主を賛美するだろう、という意味らしい。しかし、イザヤ書４３章２１節には、次のような言葉があります。

『わたしはこの民をわたしのために造った。
　彼らはわたしの栄誉を語らねばならない』（新共同訳）
『私はこの民を私のために造った。
　彼らは私の誉れを告げるであろう。』（聖書協会共同訳）

詩編１０２編の「主を賛美するために民は創造された。」という画期的な訳語は、この詩編の中では適切ではないかもしれませんが、人間についての聖書の主張からは、外れているわけではない、と言えるでしょう。

（６）神様を身近に感じるために、聖書を読み、詩編や特祷をもっと祈ろう

話を元に戻します。
先ほどの、朝夕の礼拝の解説の部分。
「毎日聖書を朗読し、詩編を歌って神をほめたたえ、祈りを献げて日々の生活を神と人とのために清めることは、初代教会からの営みであった。」というのを読みましたが、この言葉に続いて、「わたしたちも、「朝の礼拝」「夕の礼拝」によってこの営みに加わるのである。」と書かれています。

この、初代教会からの、毎日聖書を読み、賛美をする営みに、私たちは加わっているでしょうか？

聖餐式やみ言葉の礼拝というのは、普通日曜日にしかいたしません。ですから、読む聖書の箇所も各日曜日に、旧約、使徒書、福音書が１か所ずつしかありません。毎日聖書を読む、ということからは遠く隔たっています。私たちの日曜日の礼拝が、そのあとに続く週日、月曜日から土曜日までには結びついていないのです。しかし、朝夕の礼拝をしたなら、日曜日の特祷をその週の間、何度も祈れます。

２年前に気づいたのですが、Ｂ 年の特定７の日曜日、旧約にはヨブ記が選ばれています。しかし、Ａ年、Ｂ年、Ｃ年の３年間で、ヨブ記が読まれる日曜日は、Ｂ 年の特定７と、Ｃ年の復活節第２主日です。しかし、Ｃ年の方は、第一朗読に使徒言行録を使えば、旧約は読まないわけです。他に毎年復活日の前日の聖餐式では旧約にはヨブ記が選ばれています

が、普段私たちが日曜日にヨブ記を読むのは、３年間ではＢ年の特定７だけです。

しかし、このヨブ記という旧約聖書の中の大作は、もっとじっくり読むと大変味わい深いものです。朝夕の礼拝に指定されている旧約聖書では、今年の場合は８月２５日木曜日の夕方から毎夕９月２０日水曜日まで、約１か月間、毎夕これを読んで、味わえるようになっています。来年の場合は８月から９月にかけて、朝の礼拝で同じ個所を読むように指定されています。現在の祈祷書の解説書によると、１年間朝夕の礼拝を続けたら、旧約聖書を１回、新約聖書を１回読めるように配置している、とのことです。

ヨブ記について、もう少し書くと、現代のユダヤ教のラビ（指導者）H. S. クシュナー師が、『なぜ私だけが苦しむのか　現代のヨブ記』という本を出して、これはユダヤ教よりもキリスト教の信徒に大変評判になり、著者のいるアメリカだけでなく、日本でも、岩波現代文庫で出されています。原題は「WHEN BAD THINGS HAPPEN TO GOOD PEOPLE」（善い人に悪いことが起こる時）です。著者の息子アーロンは、早老症という病気で、食事をしても体が大きくならず、老人のような風貌で、１４歳の誕生日の二日後に亡くなってしまいました。そんな子どもの父親としてのラビがどのような信仰になったかを語り、多くの不幸に見舞われた人たちを勇気づける本として高く評価されています。そしてこの本にも、著者のヨブ記に対する考え方が述べられているのです。

キリスト教とユダヤ教の別なく、多くの聖書の民に読まれているヨブ記を、３年間で１度か２度、主日礼拝では、ほんの一部だけ読まれているだけです。

私はみなさんに、「毎朝毎晩、各家庭で祈祷書通りの礼拝をしてください」とは申しません。しかし、朝夕の礼拝で唱える詩編や聖書日課の一部を生活に取り入れることはできるのではないかと思います。大斎節中の現在、例えば３月５日は大斎節第２主日ですが、祈祷書の５７０ページを開くと、この日曜日から朝の礼拝では、第１日課として旧約のエレミヤ書という、有名な預言書を読むことになっています。また第２日課は、パウロの書いた高い評価をうけているローマの信徒への手紙も読み始めるのです。

この年間聖書日課・詩編を夜、落ち着いた時間に読んだり唱えたりすることから、もっと

聖書に親しみ、賛美の生活を深めることができるのではないでしょうか。
また、聖餐式やみ言葉の礼拝では、代祷をするのに、決められた式文に多少具体的な名前や事柄を入れるだけですが、朝夕の礼拝の最後は、１０８ページから載っている、４９の諸祈祷や多くの感謝の祈りを入れて、豊かな礼拝ができるのです。

これらは、私たちの月曜日から土曜日までの日常生活が聖書朗読と賛美の生活になる訓練として、また日常の事柄を集約する集まりとして、初代教会から続けられた信徒の営みであって、日曜日の教会という限定された時間と空間を超えて、生活全体を聖別することを目的とした信仰の行為なのです。

私たちの礼拝が、聖餐式だけの限られた聖書と祈りからもっと広がり、日常生活へ結びついてゆくために、主日や祝日にしか使えないみ言葉の礼拝に替えて、日曜日の礼拝にも、信徒によって捧げる公祷、朝夕の礼拝をもっと導入してはどうでしょうか。

（７）詩編の意味を理解して唱えよう

詩編のことについて、もう少し書かせてください。アメリカやイギリスの祈祷書の表紙には、付録として「ダビデの詩」というのがありましたね。詩編すべてをダビデが作ったわけではないのですが、「詩編と言えばダビデ」ということになっています。そして、祈祷書の終わりには、全１５０編が付録として載っています。私が神学生だった頃は、文語の祈祷書で、１５０編ある詩編を１か月の朝夕の礼拝ですべて唱えられるように、６０に分けられていました。たとえば、１日早祷は１～５編。１日晩祷は６～８編という具合です。現在の日本聖公会の祈祷書にはそのような区分けはありませんが、アメリカ聖公会の祈祷書には、それぞれの詩編の前に、ラテン語のタイトルがあり、現在も１か月の朝夕の礼拝に唱えられるように分けられています。毎朝夕の礼拝で読む日課同様、詩編もそれぞれ指定されてはいますが、それに従わず、１編から１５０編まで１か月で唱えようとすれば、そんな使い方もできるようになっているのです。

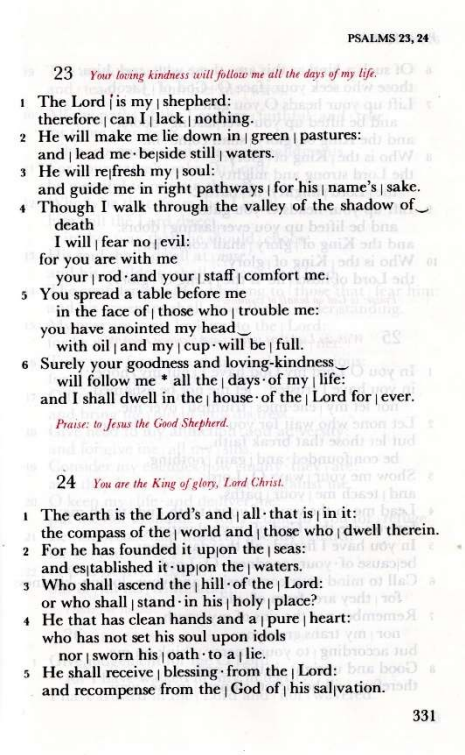
私は昨年の大斎節中、１９７８年版のオーストラリア聖公会の祈祷書に載っている詩編を読むことにしました。この祈祷書は、私たちが詩編にもっと親しむように、付録の最初に詩編の意義や説明文が書かれており、更に各詩編の前後に、簡単な説明が、赤い字で載っ

ているのです。私たちに一番親しみのある、詩第２３編の頁を引用してみます。

詩編の前の説明文

【詩編の見出しについて】

教会の日々の祈りにおいて、詩編は客観的な祈りの規律を形成します。 キリスト教以前のテキストですが、それでもなお、それらはキリスト教の祈りへの招待状です。 各詩編の番号の後に、それについてのクリスチャンの解釈の可能性を示唆する文が印刷されています。これは、会衆の応答または繰り返しの言葉としても使用できます。 同様の資料が聖餐式の一連の特祷と朗読のそれぞれで提供されています。 各詩編の終わりに、詩編から生じるさらなる祈りの提案が印刷されています。



PSALMS 23, 24

23 *Your loving kindness will follow me all the days of my life.*

1 The Lord | is my | shepherd:
therefore | can I | lack | nothing.
2 He will make me lie down in | green | pastures:
and | lead me · be|side still | waters.
3 He will re|fresh my | soul:
and guide me in right pathways | for his | name's | sake.
4 Though I walk through the valley of the shadow of ‿
death
I will | fear no | evil:
for you are with me
your | rod · and your | staff | comfort me.
5 You spread a table before me
in the face of | those who | trouble me:
you have anointed my head ‿
with oil | and my | cup · will be | full.
6 Surely your goodness and loving-kindness ‿
will follow me * all the | days · of my | life:
and I shall dwell in the | house · of the | Lord for | ever.

Praise: to Jesus the Good Shepherd.

24 *You are the King of glory, Lord Christ.*

1 The earth is the Lord's and | all · that is | in it:
the compass of the | world and | those who | dwell therein.
2 For he has founded it up|on the | seas:
and es|tablished it · up|on the | waters.
3 Who shall ascend the | hill · of the | Lord:
or who shall | stand · in his | holy | place?
4 He that has clean hands and a | pure | heart:
who has not set his soul upon idols
nor | sworn his | oath · to a | lie.
5 He shall receive | blessing · from the | Lord:
and recompense from the | God of | his sal|vation.

331

２３編　前の赤字部分　あなたの恵み深い慈しみは、生涯私に伴う。

　　後の赤字部分　善き羊飼いのイエスに賛美

２４編　前の赤字部分　あなたは栄光の王、主キリストです。

（８）祈祷書で生きた信仰の先輩たち

公祷（祈祷書）という、信徒の祈りの本を生活の一部にして生きた先輩たちふたりを紹介します。

私が大学生になって故郷福山を離れ、京都でキリスト教の勉強を始めた頃、神戸で熱心な信仰者に出会いました。牧師と結婚したが、９人の子供を残して夫が亡くなり、女手一つで子供たちを育てた人でした。その人が自分の苦しい生活の中で、思いがけず人々に助けられて家族を養っていけたことをよく話してくださって、その時、私にしばしば語ったのは、文語の祈祷書、三位一体後第六主日の特祷でした。

「『主を愛する者のために、他人の思いに過ぎたる賜物を備えたもう神よ、』という呼びかけの言葉を覚えている？　私は何度もこの神様のことを感じてきたのよ。」と彼女は言うのです。

祈祷書の特祷は、１年に１度、日曜日に司祭が祈るのを聞くだけだから、教会の礼拝堂の中だけのものと思っていましたが、そのご婦人はいつもこの特祷を生活の中で祈り、確信してきたのだろうと、祈祷書が彼女の生活に根付いていることに驚かされたことでした。

私が神学校の３年生になった時、長年いろいろアドバイスをしてくださっていた、島根県浜田市にある浜田キリスト教会の瀬山司祭が亡くなりました。この先生も詩編を読んで、その素晴らしさをよく話してくださっていました。
瀬山先生は牧師になる前は、大工さんでした。そして、この世の世界がどんなに素晴らしく作られているか、先生はすい臓がんで亡くなる半年前に、パプアニューギニアのワークキャンプにでかけて、あんな美しい所に行ったことはなかった。と病床で語られていました。先生がお元気なころから「詩編１９編は読むたびにほれぼれする。『もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空は御手のわざをしめす。この日ことばをかの日につたえ、この夜知識をかの夜におくる』。空を見上げたら、いつもこの詩編を思い出す。そしてその詩編の最後に、説教の前に祈る言葉が出てくる。『ああ主よ、わが岩、わが贖いぬしよ、わが口の言葉、わが心の思いを御心にかなわしめたまえ』と祈るんだ。」と説明されていました。

（９）最後に「大斎」という言葉について

現在は３月で、教会暦では「大斎節」という季節です。カトリックやルーテル教会、そして隣の大韓聖公会などでは「四旬節」（４０日という意味）、日本基督教団などでは「受難節」と呼んでいます。イエス様がヨハネから洗礼を受けて、荒野で４０日断食の修業をしたことや、十字架の苦しみを受けられたことで、このような名称を使うのでしょう。日本聖公会は、クリスマスやイースターなどのお祝いをする「白」の祭色の季節以外は、毎週金曜日を「斎日」と呼んでいます。ところが大斎始日からイースターの前日まで、６回の日曜日除いて、この斎日が４０日続くので「大斎」と呼ぶのです。そういう意味では、日曜日の礼拝よりも週日の方が「大斎」と呼ぶのにふさわしい季節です。日曜日だけでなく、毎日祈りの生活をするために、公祷に親しんでいただきたいのです。

次回は、最後なので、「朝夕の礼拝」よりも簡単に普段の生活に取り入れやすい、英国やアイルランドの「(A) Service of The Word（み言葉の礼拝）」などを紹介する予定です。